日帝下における朝鮮の四月初八日(I)

片　茂永

Abstract

The East Asian Buddha's birthday festival is an outcome of a consistent cultural interchange between China and India. Therefore, *chopail* is an interesting subject that leads us to the further studies of the root of these two cultural clashes as well as two thousand years of cultural exchanges. However, in addition to these macroscopic cultural interchanges between two major civilizations, there also exist microscopic exchanges such as the Korean and Japanese Buddha's birthday festival. Albeit it is widely acknowledged that the Buddhism has reached Japan through one of three ancient Korean kingdoms, *Paekchae*, it is barely known that during the Japanese colonial period, the Japanese Buddhism has largely influenced the Chosun Buddhism in vice versa. Therefore my intention is to reveal the vice versa cultural interchange relations between Japan and Korea through further studies of *Chopail*.

1.　はじめに

韓国近代仏教を探るとき，当時の心理的，あるいは実際の布教における非常に大きなストレスとなり，抑圧手段であった数百年間の‘僧尼都城出入禁止’を無視することはできない。僧侶が漢陽（ソウル）へ足を踏み入れることができないという法律が三百年以上持続された状況で，四月初八日が果たしてまともに伝承されていたかという疑問は拭い切れない。また，僧侶たちの都城出入禁止が1895年に日蓮宗の僧侶佐野前励の関与により解除されたことを，朝鮮仏教の将来を予測する重要な手がかりであると見るものが多い。韓国仏教の旧怨をはらすことになった契機が，日本仏教の干渉によるものであったからである[1)]。

そして，このときからの朝鮮仏教を親日仏教だと断定する人もいる。一時的に民族主義的

1）朴景勲『佛教近世百年』民族社，2002. 林慧峰『親日仏教論』上･下，民族社，1993

な仏教団体や宗派も活動するにはしたが，解放を迎えるまでの全般的な朝鮮仏教界が本意にしろそうでないにしろ，日帝の膨張主義に従順したことを示す多くの事例を証拠として挙げることができる。このような一連の作業に対し，韓国仏教界には今も賛否両論があるようだ。しかし民俗学の立場からの民俗資料の解釈，そして関連する過去の紆余曲折を見ると，それが一時的とはいえ，決して見過ごすことはできない。それら紆余曲折がこれまでの伝承に陰にも陽にも，どのような形態であるにしろ影響を与えているからである。そうすることが韓国仏教界に何の得になるのかという意見が一部存在したとしても，文化解釈の手がかりになる一つの避けては通れない事実なのだ。さらに四月初八日は仏教行事としてだけでなく，歳時風俗として古くから位置付けられたものであり，韓国民俗学や韓国文化一般の問題でもあるのである。

私が四月初八日と日帝植民統治の相関関係に関心を持った直接の背景は以下のようである。現在のわたしたちが知っている四月初八日の関連用語と朝鮮時代までのそれらとの間には，いぶかしい断絶や伝承の不自然な点が存在する。三国時代，高麗時代，朝鮮時代を経て伝わった多くの文献のなかから四月初八日の記録を見てみると，主に看燈，観燈，燃燈，燃燈都監，燃燈道場，燃燈大会，燃燈会，張燈，燈夕，呼旗などの用語が出てくる。しかし，日帝時代にはそれまで使われていない，見慣れない用語が突然出現してくるのである。どのような背景をもって新しい用語が作られたのか，それを探るための歴史学，あるいは仏教学からの研究があってしかるべきだった。しかし，それら分野からの接近が十分でない今，民俗学の立場からこの問題について言及する必要があると考えている。

日帝下，四月初八日の際に主に使われた用語を整理すると次のようである。燃燈行列，燃燈行進，提燈行列，奉祝，奉祝法会，奉祝法要式，釈誕節，釈誕祭，釈尊降誕紀念会，釈尊降誕会，そして驚くことに花祭りという言葉も使われていた。ところで，よく考えてみると，朝鮮時代までの初八日に燈を手に持ち，三列か四列になって通りを行進したという記録は見た覚えがない。中国の行像が伝来した可能性もあるが，行進曲に合わせた一糸乱れぬ行列とは違うものだ。また，奉祝という用語もどうやら朝鮮時代までは四月初八日に使われた用語ではないようである。燃燈行列や提灯行列などのパレード式の行進文化や，奉祝云々という式典行事を挙行したことにも，どのような背景があったのか気にせずにはいられない。また，寺によっては四月初八日に信者の左胸に花をつける風習もある。このような要素一つ一つを含んだ四月初八日の大部分を，韓国人は伝統的な歳時風俗とみなしている。ソウル市ではソウル地方文化財としての指定を検討するなど，四月初八日，いわゆる釈迦誕生儀礼を固有として非常に寛大に受け入れている。仏教が伝来してどのみち千数百年の時が過ぎているのであるから，伝統文化として定着したという自負心と，人々の無意識的な納得が潜んでいるようだ。

しかし，現時点で韓国人が体験する四月初八日に，長い間の伝承とともに短期間の急造，

あるいは変質が共存している可能性は排除できない。また変化それ自体は文化の本性であり望ましいことでもあるが，時には短期間に生まれた他意が作用している可能性がある。これを機会に今の韓国文化を客観的に見ることができるであろうし，もしそうした変化があったならば，曹渓宗や奉祝委員会ではこれに関してどのような悩みを抱えていたのか，気になる問題である。

ここで示す資料は日帝下に発行された朝鮮の仏教関連定期刊行物と，同時期の日本資料を主としている。

2. 各地の初八日行事

現在の初八日行事の要諦になっているのは燃灯であり，その燃燈会に関する儀礼を伝える資料の中で，もっとも忠実な内容はやはり『高麗史』である。特に巻第69に出てくる「嘉禮雑儀」がそれであり，大司成であった鄭麟趾が教修したものとなっている。しかし，この資料は上元，すなわち太陰暦の正月十五日を迎えて燃燈会を開催した王室の儀礼が主となっており，釈迦誕辰を慶祝する本格儀礼と見るのは困難だ。さらに，民衆を動員して行われた大々的な釈迦誕辰儀礼に関する資料を探すのは，朝鮮時代を通しても簡単ではない。お釈迦様の誕生日を迎えた民衆の喜びを伝える資料はあるが，集団的で組織的な式典行事を詳細に窺い知ることのできる資料が出てくるのは，20世紀に入ってからのことである。

1924年6月に出版された『朝鮮仏教』第2号は，1枚のモノクロ写真とともに各地の初八日記念会の様子が記されている[2)]。写真の撮影場所は明記されていないが，四月初八日の行事を厳粛に行なう雰囲気を伝えるものとして遜色ない。

釈尊降誕紀念会という見出しの下には，各地で大変盛況に行われたと記されており，会場には1000人を超える信徒とともに李完用，朴箕陽，張憲植事務官，萩原宗務課長，その他に官民有志，各宗僧侶が参加していたとある。ここで言う事務官や宗務課長という肩書きは，総督府所属のものだと判断される。会場には朝鮮の伝統音楽が鳴り渡り，釈尊仏を中央正面に安置し，ろうそくの灯が燈された，非常に厳粛な雰囲気であった。さまざまな来賓の祝辞の後，正午すぎには昼食を兼ねた饗応が続いた。朝鮮時代の抑仏政策という陰鬱なトンネルを通り過ぎた韓国仏教を考えると，華麗な変身としか言いようがない。当時の四月初八日は，変化の事実を如実に見せてくれているのである。

一方，咸鏡道安辺釈王寺の初八日はこんな様子だった。この年，陰暦の四月初八日を迎え，十数日前から各地から人々が続々と集まり始めたのだが，その数は実に5，6千人に及んだと言う。大法堂広開道場で式が行われ，仏教青年会は停車場付近に無料の茶店を出し参拝客

2)『韓国近現代仏教資料全集』(以下，全集) 25，民族社，1996

を接待した。式は崔就虚住職の主宰で式次に従って進み，侍輦掛仏移運を始めとする荘厳な式や，男女学生140余人による讃揚歌の合唱が行われた。午前11時ごろに一旦式を終えた後，夜8時から僧侶と学生たちによる提灯行列まで行われ，これまでにないほど大盛況だったと伝えている。ところで注意を要するのは，提灯行列に市民が参加したと言う記録が見当たらない点である。学生たちを動員した行事であったことを示唆する一節である。

続いて開城の初八日を伝えているが，ここでは開城が高麗の古都であり，仏教に対する信仰心が厚い地方である点が強調されている。この年も例年と同様に，市内の商店はきらびやかな燈台と色燈を飾り，特に男児は夜に山へ登り爆竹を鳴らして遊ぶなど，にぎやかな様子が伺える。なかでも1924年の初八日は日曜日と重なった関係で，多くの朝鮮民衆が興に乗じ，その様子は歩行者天国さながらだったという。ここで興味深いのは，高麗の古都にふさわしい開城の初八日は，朝鮮時代の文献が伝える記録をそのまま取り出したかのようであることだ。まばゆいばかりの色燈に灯を燈し，夜が更けるにつれ一層高揚して戯れる初八日は，日本仏教の干渉以前の光景であった。厳粛な式典行事や画一的な行進文化は，韓国の初八日ではなかったということである。

忠清南道江景では，観燈大会形式の記念式が開かれた。特にここでの初八日は地域の商業発展を宣伝しようという目的で，この地域の商業従事者と東亜日報，朝鮮日報の各江景支局の後援で2日間開催されたという。

また全羅南道長城郡白洋寺でも多くの人々が集まり不夜城を築いたという。ほかにも慶尚南道東莱郡北面梵魚寺と東莱仏教布教堂の主催で釈尊降誕紀念会が開催され，参加したのは北面明亜学校の学生と，東莱シッタル学校の学生，そして仏教少年700人ほどだったという。つまりここでも，動員された学生たちが主となって行われたわけだ。

醴泉仏教堂では釈尊降誕を記念し，初八日午前10時から盛大な式が行なわれた。午後2時からは唯一学院の女学生による運動競技と提灯行列があり，崔就虚法師による講話をもって閉会された。つまり醴泉の提灯行列も，やはり学生を動員した行事であったことが分る。

上で紹介した『朝鮮仏教』第2号の記事からは，伝統的な初八日の痕跡も見えるが，官，すなわち朝鮮総督府や地方の郡，面事務所等が関与したことがうかがえる。このような背景には，大東亜共栄圏の基調の上に仏教文化圏を重ね合わせ，東アジアを順従させようとした当時の日本の戦略があった。そうした日本のアジア的文化政策は，西洋文化の代名詞的なものであるクリスマスに対抗するため，釈迦の誕生日を国際慶祝日として認定させようと奔走した様子にも現れている。時が流れ，スリランカの努力で2000年からは釈迦の誕生日であるウェサクが国際慶祝日として国際連合から認定を受けることになったが，実はスリランカとは別の目的で，日本によるそのような動きがすでに起こっていた。1925年11月1日午前10時，東京の増上寺で開催された東亜仏教大会での提唱がそれである。東アジア各国の代表が顔を揃えた3日間の会議には，当時朝鮮で貴族階級に属していた人物たちも多数参加してい

た。ここで満場一致で採択された決議案の二つ目に眼が引かれる。それは“大聖釈尊降誕の聖日を期し，仏教徒は一斉に降誕祭を行なひ之れを以て全人類の習俗たらしめんことを期す[3)]”という決議案であり，これは‘東亜民族の精神的結合’という明らかな意図により決定され，大東亜共栄圏と一脈相通ずる一種の政治思想でもあった。さらに，このような政治的意図は，1929年10月11日，京城で開かれた‘朝鮮仏教大会’で演説した斎藤実朝鮮総督の祝辞に克明に現れている。そこで斎藤は，“惟フニ我国ノ現状ハ真摯熱誠ナル宗教家ノ奮起ニ俟ツモノ頻ル多シ殊ニ思想ノ善導並ニ内鮮同胞ノ融和ノ如キハ宗教ノ力ニ依リ初メテコレガ完璧ヲ期シ得ベシ[4)]”と述べている。

このような理由で，当時の日本は朝鮮だけでなく東アジア各国の四月初八日行事に対して多大な好意を持ち，支援を惜しまなかった。そして，これら事例の一部をわたしたちは解放前朝鮮の資料に見ることができる。このような状況のなか，伝統的な初八日の風習に日本版四月初八日である花祭りが混ぜ合わせられる可能性は，初めから非常に濃厚であったのだ。

金泰洽は「釈尊降誕潅仏会に就いて[5)]」で，浴仏よりも潅仏と花祭りという言葉を多用しながら，これらが朝鮮の伝統的な浴仏の代わりに広く流行していると言っている。平素の彼の言動を通してみると，どれほどの信憑性があるか疑わしくもあるが，いずれにせよ花祭りが初八日の代わりに意図的に使用されることが増えはじめた例として，注意を要する。また伊政博中は「花祭挙行に就いて[6)]」で，京城の例を見ると今までは主に青年同志会や学生たちが中心になっていたが，これからは一般民衆を大々的に参加させなければいけないと力説している。伊政が言う初八日は公会堂の式典行事や市街行進を念頭に置いた花祭りを示している。そして伊政の言動からさらに読み取れる重要な点は，それまで朝鮮には市民による初八日の市街行進がなかったか，あるいは消極的であったという事実である。

また『仏教』第25号は，各地で行なわれた初八日の行事の様子を次のように記録している。まず，慶尚北道安東の普光学校では当日休校して記念式を行い，臨時に設置された百以上の電燈がきらめき花の春宵をなし，観衆は数千人に達したという。学校を休校措置にするほど初八日は大変重要視されていたという証拠である。また咸鏡道安辺の釈王寺では，当日午前11時から80余人の信徒と100余人の学生，そして千人を越える観衆が集まり，盛大で厳粛な記念会を開いたという。午後4時からは宣伝文を配布し，夜には提灯行列と説教が行なわれるなど，群衆は実に6, 7千人に及んだと伝えている。

栄州鳴鳳寺では，町の入り口から寺につながる道の両脇に提灯を燈し，大変な人出であった。記念式は昼夜二回にわたって行なわれ，昼の記念会ではまず食事が出たあと，説法，献

3)「東亜仏教大会の経過」『支那時報』第3巻第6号，東京支那時報社，1925年12月
4)朝鮮仏教団『朝鮮仏教大会記要』1930，p. 36
5)『朝鮮仏教』第25号，1926年（全集27）
6)『朝鮮仏教』第25号（全集27）

供，讃仏歌，閉式と続いたという。

1928年に出版された『朝鮮仏教』第49号[7]には，『朝鮮仏教』の主幹である中村健太郎が「連合花祭に就いて」を寄稿しており，ここで彼は，東京や京都をはじめとする日本各地で流行する花祭りを京城でも盛大に開催しようと熱く語っている。そして京城で準備されている状況を，次のように紹介した。

まず，花祭奉讃会が組織されていることを明らかにし，会長には京城府尹，すなわちソウル市長が就任し，朝鮮仏教中央教務院，商業会議所，財団法人仏教団，各宗同志会，京城商工連合会，中央繁栄会，実業同志会などが会員となっていた。そして内鮮人，すなわち日本人と朝鮮人が一緒になって初八日行事を大規模に行なおうと力説していた。ところで，ここで注目されたのは日取りの問題であった。名実ともに内鮮一体の初八日行事のためには，同じ日に行わなければならないというのは当然の問題であるが，日本は陰暦の四月初八日を固守する朝鮮の風習とは違い，陽暦の4月8日を基本としているため，日にちがばらばらになってしまうのだ。しかし結局は，朝鮮の風習である陰暦の四月初八日に朝鮮と日本の合同初八日行事を行おうという意見が，強力に提議されたのだった。

ここで，日本の恣意的で流動的な初八日の日取りの問題が，今日でも浮かび上がることにも触れておこう。現在も中国北京や東南アジア各国でお釈迦様の誕生日の行事を国際的な合同行事として行おうという動きがある。そのたびに，この問題が大変不都合な課題として台頭するのである。

1928年に出版された『朝鮮仏教』第50号[8]には，作者不明の「京城五団体連合奉讃花まつり――総督，政務総監の臨場」が掲載されている。主に京城府内の初八日の準備状況を伝える記事で，朝鮮銀行（現在の韓国銀行）前，光化門前通り，奨忠壇公園にそれぞれ花を飾った小さな浴仏堂を設置し，そのなかに誕生仏を安置したという。そして朝から奉祝を知らせる祝砲を放ち，空を飛ぶ飛行機は色紙を撒いた。それはまるでシッタルタ誕生のとき，天から龍が五色の雨を降らせたという説話を再現するような興を添えたもので，多くの朝鮮民衆が集まった。好奇心を刺激するこのような方法は，当時の東京の花祭りをほとんどそのまま行ったものだった。

このようにして午前11時には朝鮮銀行前，午後1時には光化門前通りで浴仏式を厳粛に行ない，市内の各日曜学校から来た千数百人の学生たちが卍が書かれた旗を持って，明洞を通り奨忠壇の式場へ入場した。奨忠壇公園はすでに黒山の人だかりで立錐の余地もない状態で，山梨総督と池上政務総監も参加していた。式順にのっとり，まず馬場奉讃会長の挨拶があり，続いて総督と政務総監を先頭に各団体の代表，日曜学校の学生代表が浴仏をした。次に同学校の学生，約千人が花祭歌の合唱をし，最後に馬場会長の発声で万歳三唱をし，閉幕した。

7）全集30
8）全集31

ほかにも，京城府内の要所要所では仏教婦人会の会員たちが花を売る姿が見られたが，これもまた日本の花祭りを真似たものだ。花は左胸につけるようになっており，現在まで韓国の初八日に残っている風習の一つである。

また明洞や南大門，鐘路などの主な商店は，釈迦の誕生を象徴するさまざまな飾りをしたり燈をたらしたりした。市内は終日騒然とし，騎馬警官が動員されるほどであった。午後6時過ぎには京城ホテルで総督府官吏をはじめ奉讃会長など京城の有力者たちが集まり，豪華な記念会が催された。

そして特記すべきことは，この年の初八日を境に日本の初八日，すなわち花祭りと同様に子どもたちを中心としたプログラムが多様になったことである。ここですべてを挙げることはできないが，一つだけ紹介すると，例えば，京城の護国寺という寺では青年会員が子どもたちを集め，化け地蔵やその他の童話劇を上演した。劇化形式で日本の昔話を朝鮮の子どもたちに見せる事例はこのころから大変盛んになった。

同じく『朝鮮仏教』第50号には朝鮮仏教団の丸山公州支部長が報告した「忠南公州の花祭挙行」が掲載されており，学生動員と関連した興味深い記録が残っている。初八日の日，公州寺では午後1時から浴仏式を始めているが，そこには朝鮮仏教団公州支部と‘協定’を結んだ，この地域の各中学校及び小学校，普通学校の学生約2千人が参加している。つまり，朝鮮の初八日を日本版初八日である花祭りに誘導するために，当時日本がどれほど緻密であったかを示唆する事実であるほかない。また，花祭りに使う甘茶を朝から配り，子どもたちは夜遅くまでそれを瓶に詰めて帰るなどし，花祭りの雰囲気が充満していたと記している。そして夜には日曜学校の学生百余人が奉祝提灯行列をし，浴仏式に参加した学生や子どもたちには旗，鉛筆，絵はがきなどを配った。茶などのさまざまな費用は公州支部から一部支援されたという。これは，総督府と緊密な関係を持っていた朝鮮仏教団の資金が，初八日行事の花祭り化に使用されていたということである。

丸山公州支部長は花祭りの宣伝にも熱を上げていて，花祭りを行なうことを知らせる宣伝文と花祭の歌を色紙に4千枚印刷して公州面に配布し，ポスターを張って花祭りの趣旨を広く宣伝した。また，花祭りの宣伝と資金調達を兼ね，造花3千個を公州地域の人士に販売した。このため公州地域の一般人士，道庁官吏，地方有力者，資産家などはまず花を販売する委員になり6日間活動した。このような丸山公州支部長の熱意により，公州の初八日は花祭りの面貌をひとつひとつ受け継ぎ始めたのである。

1929年の『朝鮮仏教』第61号[9]にも，各地の初八日や花祭りの様子が掲載されている。京城の場合は1年前の『朝鮮仏教』第50号と大同小異であるが，朝から南山で祝砲を撃ったり，飛行機が上空を旋回したという宣伝方法を見る限り，当時の東京の花祭りの雰囲気そのまま

9）全集32

だと考えて差し支えない。また，京城では仏教婦人会員たちが花の販売もしたが，通行人に無料で胸につけてあげたりもした。朝鮮銀行前では甘茶を通行人に配ったりし，また子どもたちはここで儀式を終えた白い象の造形物を光化門まで引っ張っていくのに動員された。これはたぶんインドの白象行列と，中国の行像から由来するものだと考える。最後の儀礼会場である奨忠壇では，総督の代わりに総督府の松寺法務局長代理が参加して盛大な式が行なわれた後，子どもたちの行進が再び大々的に行なわれ，子どもたちは白い象の造形物を引きながら生誕奉祝歌を歌った。高麗と朝鮮伝来の燃燈は夜になってやっと目につく程度であった。

このとき仁川では仁川仏教各宗連合会の主催で児童800人が参加して行なわれていた。子どもたちの手には旗が握られ，左の胸には桜の花がつけられており，桜をつけたのはもちろん花祭りの模倣であった。子どもたちは誕生仏が安置された小さな堂が乗った白い象の造形物を引いて，市内を回って式場である華厳寺に到着し，そこで灌仏式が終わるまで重要な役割を担った。

大邱では1929年の初八日は大邱仏教会が主催し，大邱奉讃会の後援によって記念式が行なわれた。この日，朝から祝砲を撃ち大邱市民たちの興味を呼び起こすと，午後2時には記念式場である奨忠壇に続く道は，多くの人でごった返していた。会長の開会の辞を口火にプログラムが始まり，花祭の歌の合唱，童謡，そして市街行進が行なわれた。行進は楽隊の先導で，各宗婦人会，そして子どもたちに取り囲まれた象を先頭に通りを歩き，光門寺に戻ってきたのだが，一行の後ろで美しい花傘を翻し五色のビラを撒きながら徐行する自動車も人目を引いた。

大田では昔ながらの初八日の光景はほとんど残っておらず，ほぼ花祭りが踏襲されていた。大伝寺では慶讃講演会のほかに甘茶を接待したり，花旗と花章をつけてあげたりした。花章とは当時花祭りで使った花徽章を示すものでこれも左の胸につけるものであった。午後2時からは子どもたちによる市街行列が行なわれ，このときの光景を旗があふれんばかりだったと描写している。

初八日の伝統がきちんと維持されていた開城は，開城警察署長が直接出て統制するほど，通りは3万人を超える人々で埋め尽くされた。このとき秩序維持に協力した団体として，松都少年団が紹介されている。開城少年団の活躍も特記すべきことであるが，さらに注目したいのは開城券番組合長である権容洛の協力で妓生たちが花を売る仕事に動員されたことだ。そして，これが開城の初八日に花祭りの風習が入り込むきっかけとなった。

咸鏡道の咸興でも初八日の花祭り化が進行していた。白象行列が児童たちが中心になって行われたことなどは，他地域と変わりはなかった。夜には講演会と釈尊伝という映写会があった。

羅南でもこの日朝8時に初八日，すなわち花祭りを知らせる祝砲3発が鳴り響いた。正午からは高野山というところで児童50余人を含む参加者による白象行列が始まり，中央公園に

到着した2時半ごろから潅仏式が行なわれた。続いて子どもたちによる三周行道，奠供奏楽，読経，各学校児童生徒代表による献花，そして朝鮮仏教団支部長，知事，面長，信徒代表の順に祝辞をし，最後に花祭歌の斉唱があった。

同じく1929年6月に出版された『仏教』第60号[10]は各地の初八日を少し違った側面から報告していて興味深い。

まず，京城では仏教専門学校の学生たちの活動が目立っており，彼らの活動は分隊伝道と教友活動に分けて紹介されていた。分隊伝道とは，初八日に光化門前通りとパゴダ公園，安国洞交差点で3分隊に分かれて伝道を行なうもので，このときの指導者は金泰洽であった。また仏教専門学校の教友活動は，初八日に合わせて釈尊降誕奉祝に関するビラを20万枚印刷し，市内各所にまくことであった。

一方，東大門近くの安養庵では李能和の講演があり，未曾有の盛況ぶりであったと伝えている。

また慶尚南道の晋州郡大本山通度寺布教堂では初八日に多くの信徒が集まるなか，呉沢彦布教師の指導で説法や講演，そして貧民救恤と施食として聖誕記念法要を行なったと記録されている。通度寺布教堂の初八日は，当時の朝鮮民衆が置かれていた生活苦に関心を傾けた貴重な時間となった。このような朝鮮民衆の生活苦に関心を持つ初八日は白洋寺でも見ることができた。全羅南道長城にある大本山白洋寺は，毎年初八日に寺を訪れる人々が数千人に及んだのだが，その大部分が旅費のない人であった。そこで彼らに大盤振る舞いしようと発起したところ，同参した人は実に2008人に達したと記録されている。この恩恵を受ける人たちも毎年増加し，1927年には1000人，1928年は1500人，1929年には2000人に上ったという。花祭りに対する総督府の至大な関心と，それに便乗しようとする多くの寺や布教堂があった反面，朝鮮民衆が置かれていた状況から顔を背けなかった寺や布教堂があり，初八日を期に実際に活動を始めたという記録は大変貴重なものである。

黄海道海州郡の神光寺では，初八日を迎え男女信徒約600人と参拝客の協力で奉讃会が開かれた。宣伝ビラを海州府，つまり海州市庁に配り，提灯行列も行なわれた。

1930年5月の『朝鮮仏教』第72号[11]は再び，初八日の光景を次のように記録している。まず釜山では，東本願寺で奉讃講演会を始めとする記念式を三日間にわたって大々的に行った。初日には巨大な白象がお目見えした。二日目には奉祝大提灯行列があったのだが，この行列も大規模なもので，まず午後6時までに西本願寺に集合したあと7時公設市場を出て電車通りを通り，駅前と富平町を経て西本願寺に戻って解散するというコースを辿った。そして三日目にはまた白象を先頭に旗行列を行なうなど，大変賑やかな記念式であった。

次の平壌の事例も花祭りが忠実に実践されているケースといえる。初八日の午後2時半，

10) 全集10
11) 全集33

祝砲を合図に公会堂では君が代の合唱とともに花祭りの法要が始まった。さまざまな寺院から来た僧侶と児童による供養，表白文の朗読と平壌市長の祝辞，また潅仏法要が行なわれた。そしてこの日午後3時半からは，児童約30人を先頭に数百人の参拝客による旗行列が市内を一周したのだが，この旗行列は日本の花祭りでよく見られる光景であった。夜には西本願寺で子ども大会があり，そのほかにも余興や写真展示会が開かれた。また市内の商店街では花祭りの装飾競演大会と花祭バーゲンセールがあり，燈はこのような花祭りの波間にちらほらと顔をのぞかせる程度だった。

ところで1930年の京城は，昌徳宮に滞在していた李王殿下の逝去に伴い，お祭りムードを自粛した初八日であったという。予期せぬ出来事で記念式を行なうのが難しくはあったが，準備していたプログラムが詳しく紹介されていて興味深い。準備段階で人員数が明記されていることを見ると，確実に人々が動員されて行なわれる祭りであったと推測できる。そこでは，初八日に奨忠壇公園には各日曜学校の学生が1500人，朝鮮人児童が1500人，総督をはじめとする官公有志来賓が約500人，一般参拝者3000人を予想していた。準備されていたのは，まず式場に誕生仏を安置する花で飾られた浴仏堂や入場アーチ，甘茶の接待のための大型テントの設置，万国旗の装飾。甘茶は各婦人会の人々が出て接待し，潅仏讃歌の作詞作曲，少年音楽隊，花火，花マーク，ポスター，パンフレット，プログラムが紹介されたビラ，自動車による宣伝，商店の装飾，記念菓子，広告板と小さな旗，手に持つ造花，夜間講演，提灯行列などが準備されていたという。このように途方もない予算と人力を勘案するとなると，初八日に対する花祭りの文化的干渉と関心の大きさは，簡単には見当がつかないほどである。

ところで以上のように5月号で自粛の雰囲気が伝えられているが，結局祭りを決行することになったことも分かり，上のようなプログラムはそのまま実行されたと思われる。朝鮮王族の喪と花祭りとは別の問題であったということである。その内容は一ヶ月後の1930年6月の『朝鮮仏教』第73号[12)]で詳細が伝えられている。

京城には朝から奉祝祝砲が鳴り響き，奉祝飛行で上空を旋回する飛行機は五色の色紙を撒いてシッタルタの誕生を再現していた。総動員された京城府内の仏教婦人会員たちは，朝から花籠を持ち，出勤を急ぐ人々の左胸に花をつけてあげた。各商店は奉祝装飾に余念がなく，明洞の三越百貨店前では瓶を手に持った人たちが甘茶をもらおうと甘茶接待所前に長蛇の列を作っていた。朝鮮銀行前の広場には卍が染められた垂れ幕が掛けられ，紅白の布を交差して巻いた4本の柱に支えられた浴仏堂が設置されていた。光化門前にもそれと同じような堂が準備されていて，丁重に頭を下げる朝鮮の人波の間には飴売りや，燃燈を売る行商人の姿も見えた。午後1時には和平教園生徒約200人が寿松洞の覚皇寺を出発し，巨大な白象を引いて光化門の浴仏堂に向かった。そこでは僧侶の読経，散華，回向，潅仏式が行なわれた。

12）全集33

そして再び白象を引いた学生の行列は光化門を出発し，太平路を通って朝鮮銀行前に到着した。光化門で行ったのと同じ儀式を終えた後，学生の一行に仏教日曜学校の児童ときれいにおめかしした子どもたちが合流し，楽隊を先頭に讃仏歌を歌いながら奨忠壇へ向かった。奨忠壇の式場にはすでに渡辺京畿道知事，京城府内の学校組合委員，松岡京日社長など関係者300余名の来賓が行列を待っていた。行列が到着すると，奉讃会長の挨拶とともに式が始まり，5時半に盛会裡に散会した。さらに午後7時からは社会館で官民合同大祝賀宴が催されたと記されている。

同じく1930年，大邱では当番寺院である東本願寺で潅仏式が行なわれ，白象行列は大和町という所から京城町を経て道立医院の敷地を通り，奉讃会場へ入場した。象行列は大邱市長，一般有志，各宗派代表，仏教婦人会，日曜学校の学生，子どもたち，僧侶などからなる数百人に及ぶ長い列を作った。このようにして午後3時から式を始め，仏教協会代表の挨拶，君が代合唱，読経，奉讃会長の挨拶，来賓祝辞，花祭歌斉唱などが行なわれた。甘茶の接待があったのはもちろん，特に午後7時からは東本願寺で奉祝子ども大会が開かれ，一方市内では花祭り大売出しが盛況であった。この初八日に実施される商店街の大売出しは，当時の日本でもよく見られる光景であった。

黄海道海州では，各布教所と海州仏教団支部の連合で初八日行事が行なわれた。浄土宗寺内が式場となり，花で飾った浴仏堂はきれいにめかした子ども24人に取り囲まれていた。そして数百人の子どもたちと正装した僧侶4人が白象行列を率い，沿道には多くの見物人が出たという。24人の子どもは紅白の紐を持って白象を引くようになっていて，数十人の信徒代表やほかの子どもたちは小旗を振っていた。このようにして中心街を一周し，式場である海州郡庁前の広場に到着したのは午後4時。子どもたちの献花，読経，潅仏式が行なわれた後，黄海道庁内務部長，海州郡守などの来賓による潅仏焼香があった。そして，夜になると仏教団員たちは燈を手に市内中心街を周り，午後11時まで市内は盛り上がっていたという。

京畿道開城では，商店ごとに軒先に旗と提灯の飾りがほどこされ，熱意が見えたという。この燈を軒先につるす風習は朝鮮伝来の初八日の風習である燈竿の名残であろうと思われる。毎年，初八日の開城は大勢の人波で，開城警察署は秩序維持に必死であった。非番の警察官もすべて召集されるほどであったという。とうとう午前10時には自動車と自転車の通行が禁止され，多くの善男善女はめいめい寺に参拝した。これは動員されて参拝したのではなく，式場が準備されておらず，自由にとにかくどこかの寺に行き燈を掛けたということである。このような例は開城で確認されており，日帝下の記録として，伝来の初八日が伝承されていたのは開城だけだった[13]。ただし，開城でも花を売る新しい風習が始まったということは前にも指摘した通りであり，これはこの年も妓生が担当した。

13）任東権『韓国風俗誌』乙酉文化社，1988，p.55

京畿道水原の場合は，花祭がほとんどそのまま記録されていたことをまず言っておこう。初八日当日の朝に祝砲が鳴り渡り，午後2時からは人々が列をなし，2時半まで浴仏堂に参拝した。花祭りを祝福するため，2000本の小さな旗を持った普通学校の学生たちを先頭に，小学校児童と稚児姿の童女20余名が後に続いて行列を作った。一般市民も参加したこの長蛇の列は，浴仏堂参拝後には音楽隊の伴奏に足並みを合わせて華虹門へ向かった。このような水原の初八日行進の風習は，数年前の10月に行なわれた華虹文化祭でも見られた。

全羅道光州では禅宗永源寺が中心となり，造花の飾りや甘茶と菓子の接待などは他地域のそれと変わりなかった。ただ，読経と説教があった後，少女たちによる舞踊と伽耶琴の合奏があったのは少々珍しいと思われる。

咸鏡南道安辺郡釈王寺の場合は，6日盛大な釈尊降誕祭を挙行し数千の参拝者があった。なお，元山駅からは人出のために臨時列車を出し，三割を以って参拝者に便宜を与えたが，臨時列車は午前8時20分，同9時43分，午後5時10分，同6時20分の4回にわたり，その盛んなることを推し量ることができよう。

黄海道沙里院では，沙里院仏教連合会が主催，朝鮮仏教団沙里院支部後援による釈尊降誕会が妙心寺で行なわれた。ここでは甘茶の接待のほかにカード接待があったと記録されているのだが，このカード接待は，当時日本で流行していた花祭カードという，葉書きサイズの紙に釈誕節に関連した絵と文字が印刷されたものを配布したものだと思われる。言ってみれば少々豪華なカルタのようなものであり，一枚二枚と集める子どもたちの趣味，あるいは心理を念頭においたもので，これが当時朝鮮でどれほど人気を集めていたかは筆者も確認できない。しかし，このようなカードを朝鮮でも配ったという事実は，記憶しておく必要がある。

仁川の場合には，仁川仏教連合会が主催した釈尊降誕会が開催され，日曜学校の学生，婦人会の会員たちが浴仏堂を参拝し，小さな旗を持って象行列をなし市内を一周した。

忠清南道大田でも甘茶の接待，花旗と花章の配布があった。花章というのは前述したものと同じ，胸につける花のリボンであり，‘花旗’とはシッタルタが誕生したとき咲いたという7房の花を描いた小さな旗で，これもやはり日本で流行したという風習である。これらを配った後，子どもたちが中心となった旗行列が行なわれた。この旗行列で使用された旗は花旗とは柄が違い，サイズも大きなものであって，これも日本の花祭りでも見られた。

そして一層興味を引かれるのは，全羅北道沃溝郡の事例である。当時の沃溝郡農民たちの間における詳細な歴史的事実は確認できないが，1930年5月6日（陰暦4月8日）に初八日の行事と‘農民慰安 Day’を同時に行なったというのである。郡内の面長と有志たちの間で協議を行ったという記録があり，沃溝地域の農場ごとに15体の誕生仏を安置し，小作人と洞内の人々が潅仏礼拝をするようにさせ，同時に甘茶と饅頭を接待したという。また，初八日と農民慰安デイを同時に行なうという内容の趣意書をビラにして各地に配布した。趣意書には，初八日が朝鮮民衆に千年以上伝えられてきた，古い民衆的な祝日であり，この日を農民

慰安日とすることは自然なことであると書かれていた。そして最後には，このように陰暦の四月初八日を宗教や宗派とは関係なく，すべての郡民が一致団結して参加する花祭りをして有益な一日を過ごそうと締めくくられていた。

そして1932年満州国が建国され日中戦争に向かう過程においては，京城の初八日，いや花祭りも次第に高調していった。1934年6月の『朝鮮仏教』第100号[14]は，厳粛な式場の雰囲気が伝わる写真とともに当時の京城の情況を伝えている。さらに厳粛になったこの年の京城の初八日は，戦争と軍国主義へと進み始めた時代背景をそのまま伝えており，奉讃式典と花祭りをはっきりと分けて行なった点には特に注意を要する。このときの状況は次のようであった。

南山を背景に設置された奨忠壇公園の浴仏堂では，すでにさまざまな来賓が行列の到着を待っており，その顔ぶれは奉讃会長，副会長，役員，奉賛会顧問，軍参謀長，憲兵司令官，陸軍少将などであった。軍首脳部が参加したという記録はそれまでにはなかった。行列が到着するや午後3時から記念式典が始まり，宇垣総督，今井政務総監，渡辺学務局長も参加した。本願寺別院に所属する日本人僧侶の散華，奉讃会長の奉讃文朗読，来賓代表として政務総監が奉讃辞朗読，そして一同による帰依三宝唱を斉唱して奉賛式典を締めくくった。

続いて午後4時から花祭りを行い，やはり奉讃会長の式辞朗読，一同による君が代奉唱，日曜学校生徒たちによる仏旗掲揚，各日曜学校の献花献供，日曜学校学生代表の灌仏，表白文と歓徳文の奉誦，子どもたちによる花御堂の周囲を行道し，京畿道知事の奉祝辞，会長，来賓，会員代表の灌仏，日曜学校生徒による奉讃歌斉唱，そして仏旗降下を行い式を終えた。この仏旗というのは，スリランカで考案され使われるようになった仏教を象徴する旗で，現在も韓国の東国大学本館で常にたなびく様子を見ることができる。いずれにせよ，このときの初八日は厳粛な式場の雰囲気が目立っていた。戦雲が漂い始めた初八日の様子は，1935年第110号『朝鮮仏教[15]』にもよく現れており，中村健太郎は「釈尊降誕奉讃の感」という文章を載せ，非常時局と初八日を結びつけ，社会的に不健全な原因の除去と健全な思想の発達を主張した。

また1935年6月出版の『朝鮮仏教』第111号[16]は，京城奨忠壇公園での花祭りを伝える記事で，その小見出しを‘特に心田開発方針に順応して’としている。心田開発とは元来仏教に由来した用語であるが，日帝下では朝鮮民衆の思想指導のために使われた相当政治的な用語であった。多くの朝鮮のインテリたちが，いわゆる心田開発講演会という巡回講演に動員されたことは広く知られている。言ってみれば初八日も，花祭りとして脚色された雰囲気のなかで朝鮮民衆の思想教育に利用され始め，その先それはさらに強化されており注意を要す

14）全集35
15）全集36
16）全集36

る。この年，京城では奉祝祝砲，商店の装飾，特集放送があり，花御堂の場所は若干変更されて奨忠壇公園，朝鮮銀行前，パゴダ公園，龍山駅広場の4箇所であった。そして花御堂を奉安した象行列は午前11時に覚皇寺を出発し，パゴダ公園，龍山駅広場，朝鮮銀行前，奨忠壇公園と，各所で潅仏儀礼を行ないながら移動した。奨忠壇公園では爆竹が鳴らされ，行進曲，君が代が演奏されるなど，例年に比べ一層高揚した花祭りが待っていた。京城花祭奉讃会長は式辞で，西洋物質文明の影響が精神文化に損傷をきたしているという現実を覚醒させ，合わせて花祭を盛大に行なうことにより‘興国浄化’を実現させようと演説した。朝鮮総督府学務局長も式辞のなかで，現在置かれた非常時局を克服する道は，花祭を盛大に開催するなど仏道を立ち上がらせることであると述べた。また，京畿道知事は式辞で心田開発の重要性を強調した。

1936年7月の『仏教時報』第12号[17]は，慶尚南道晋州の晋州教堂聖誕祝賀式を次のように伝えている。陰暦4月7日から2日間，晋州邑国峰町布教堂では日曜学校女子夜学会少女親睦会本報晋州支局連合で初八日祝賀式が開催された。卍の形の造形物には白熱電球100個余りを取り付け，明かりがつけられた。また，講演会のほかに児童劇と音楽会も開かれた。仏教時報晋州支局では，卍の文字が印刷された旗700枚を信徒たちに配布して掲揚するように言い，同両日10時からは宣伝ビラ約1000枚を市内で撒布した。

また，このころから夜間の提灯行列が例年に比べ強化された傾向があり，このような特徴は江原道江陵布教堂，忠清南道瑞山郡海美教堂，慶尚北道尚州教堂，慶尚南道通度寺布教堂，咸興帰州寺布教所など，大部分の寺や布教所で少なからず見られた。

通度寺蔚山邑布教堂の観燈式は次のように行なわれた。ここでは陰暦四月初八日の釈迦誕辰に観燈式を行なった。正午ごろには自動車2台で蔚山邑から兵営市街まで釈尊誕辰記念奉祝のビラが散布された。また開会式，宣伝ビラ散布，提灯行列，万歳三唱をするときも，繰り返し爆竹を鳴らしたという。

この年，全羅南道順天郡の大本山松広寺では，心田開発運動を開始後，始めての初八日として，その講演会に特に力が入れられた。初八日を心田開発講演に積極的に活用したケースは，慶尚北道達城郡瑜伽寺でも見られた。瑜伽寺では周辺住民たちを集め，心田開発に関する意味深長な仏陀の教理を講演したといい，これもやはり当時流行した時局講演であったと思われる。

同年の全羅北道錦山郡南二面大本山宝石寺の初八日からは，二つの特徴が見られる。一つは時局講演会の代わりに宗務所と講堂学生一同が協力し，一ヶ月前から聖劇を準備して披露したことである。もう一つは初八日に合わせ祝賀義捐金を集めたことであり，寄付者と金額が詳細に記録に残っている。

17）全集37

1937年5月の『仏教時報[18]』は，韓国の初八日史上，画期的な事件の一つを記録している。陰暦四月初八日を‘旧習打破’の第一歩とし，これからは陽暦で行なう決議をしたというものだ。決議の細かな過程は確認できないが，日取りの問題で初八日と花祭りが置かれていた微妙な関係を一掃しようと決められたことのようだ。こうして日本の花祭りと朝鮮の四月初八日は同じ日に行なわれるという，外見上にはほとんど統一された行事になった。このように初めて陽暦4月8日に行なわれた京城の初八日では，朝鮮銀行前，パゴダ公園，奨忠壇公園，京町広場を主要式場に，潅仏式と白象行列が催された。式場に行列が入場するときには，例年の朝鮮伝統奏楽が鳴り響いたという記録とは違い，行進曲が流れた。幼稚園児と学生の動員が強化され，会衆一同が君が代を2回歌っている間に仏旗が掲揚された。また，式を終えて退場するときにも行進曲が鳴り響いた。戦雲が漂う時局をそのまま反映した初八日であった。

1938年6月の『仏教』新第13輯[19]には，本山乾鳳寺京城中央布教所では特別な初八日行事を行ったと記録されており，それもやはり陽暦4月8日に行われた。

また1938年7月の『仏教』新第14輯[20]には，慶尚北道慶州郡仏国寺と石窟庵の初八日が記録されており，陰暦四月初八日（陽暦5月7日）に行われたとしている。朝鮮の全ての初八日が日本の意図である陽暦の4月8日に従ったわけではないという証拠である。

しかし，石窟庵と仏国寺はほかのプログラムでは態度を変え，日帝の意図に従っていた。その式次を紹介しよう。

一，開式	当寺	（仏国寺住持　崔翔文） （石窟庵住持　金教賞）
一，献香	仝	
一，三帰依	法僧一同	
一，読教	仝	
一，武運長久祈願黙祷	一同	
一，皇国臣民班詞斉唱	一同	
一，農山漁村振興祈願	慶州郡守　森芳介	
一，入定	一同	
一，焼香	来賓	
一，四弘祈願	法曹	
一，閉式		

18）全集37
19）全集19
20）全集19

四月初八日を迎え，日本軍の武運長久を祈願して皇国臣民云々としたことは事実であり，このような背景によって花祭りの構成要素が初八日に混ぜられたと想像するのは難しくない。日中戦争と太平洋戦争の渦のなかで，初八日が踏襲しなければならない基準としての花祭りの位置付けがこの後も続いた。

太平洋戦争の真っ只中にあった1942年5月にも，『仏教』新第36輯[21]は出版された。そしてこれ以降，記録から朝鮮伝来の初八日を発見するのがさらに難しくなる。新第36輯には徳光允の「大東亜戦下の花祭を迎え」が掲載されており，彼は“恐れ多くも去年12月8日米英に対する宣戦詔書が煥発されて以来4ヶ月間，東亜民族の百年仇敵であった米英をして東亜の天地より駆逐しているこのときに，釈尊の誕生を祝賀する花祭りを挙行するに至り，切に意義深いことだと考えております”と述べた。花祭りを大東亜戦争の精神武装にしようとする決議であった。

続いて彼は，大東亜共栄圏の仏教，あるいは世界的な日本仏教という用語をためらいなく使っており，このような態度に実際の大東亜共栄圏と仏教文化圏を同じ目的と政策で眺めていた，当時の日本の帝国主義的観点を見て取れる。朝鮮の仏教を優待しようとした背景にも日本の東アジア戦略があり，そのような渦中であったがために，朝鮮伝来の初八日習俗が花祭りによって左衝右突せざるを得なかったのである。

彼はまた，大東亜共栄圏を指導する国民として考える仏教，世界を指導する国民として考える仏教を立ち上げなければならないとし，命を国家に捧げ第一線で戦う兵士たちの辛苦を思い，国家の進運に順応並進する仏教，または教団を確立せねばならないと力説した。

一方，1943年4月の『仏教』新第7輯[22]にも，徳光翼という名前で「決戦第二年と新しい佛教への構想—仏誕を迎えて」が掲載されており，ここでは“伽藍僧風作法すべてをもって懐古的存在から離れ，決戦国民ないし指導国民の溌剌とした信仰対象とするべきであろう。祈福穣災の対象から離れ国民精神修練の対象としなければならない”と主張した。これは当時，日帝が着手していた迷信打破運動の余波であると判断できる。初八日までもが打破の対象となったのである。初八日はその民俗的な側面が軽視され，彼の言葉のように，時局に応じた単なる‘動員行事’へと変貌していくことになる。

これを反映する短い文章が同じ『仏教』新第47輯の最後のページに載っており，“聖誕記念号は決戦色に染まり雄々とした声が聞こえる”と書かれている。この決戦色の聖誕は，当時の日本の東京朝日新聞に登場した‘軍国調花祭’という表現と通じるものがある。また決戦色云々といった文句の横の広告欄には，権相老の著書『臨戦と朝鮮仏教』が紹介されていた。

初八日は，このように日本の軍国主義遂行における手立ての一つとして，急速に花祭り化していったのであった。

21）全集22
22）全集23

3. 花祭りは何を残したか

日本の花祭りは韓国の四月初八日に果たしてどのような影響を与え，また現在の韓国の四月初八日に何を残したのか。日帝時代の短期間の外圧による流行だったのか，それとも現在でも初八日の中に一つの伝承文化として定着しているのかを，ここで明らかにせねばならないだろう。過去に完結した一回性の行事だったならば，歴史の1ページを飾ったに過ぎないが，現在でも民俗として残っているならば，日帝下の四月初八日は現在，そして未来における問題を抱えていることになり，決して顔を背けることはできない。

まず，初八日の調査を始めた十数年前から，筆者が時折耳にした話のなかに‘倭燈’とか，‘倭色燈’という言葉があった。伝来の燃燈のなかでも今主流になっている‘初八日燈’は蓮の花の形をしているが，倭燈と倭色燈は日本から伝わった‘ひだ燈’を指す言葉である。形も違い，張られた紙の色も違う。ひだ燈は畳めるので保管しやすいし経済的だという営利的な目的でずっと作っている人がいる一方[23]，また倭色燈という理由だけで使うのをやめようという声が共存してきた。しかし，重要なことは今もこのような燈が残っているという事実である。

また日帝以前，すなわち朝鮮や高麗の初八日で，誕生仏を乗せた象の造形物を引いて歩いたという西域の風俗や，誕生仏を山車に乗せて引いたという中国の行像習俗が果たしてどれほど盛んに行われたのか，いまだ定かではない。しかし，日本の花祭りはそのような外来文化をさらに活性化させたものであり，日帝下の朝鮮でも初八日の必須プログラムとして定着することになったのである。

白象行列を行ったとしても，寺から象の造形物を引き出して練り歩いた後，また寺に戻る‘街路祝祭’を誘導したならば，違和感も少なかったかもしれない。また元来韓国では，寺では燈をつるして明かりをつけ，また家々で軒先に燈をかけたり，棒を立てて燈をぶら下げていた。辺りは突然真昼間のように明るくなるので，町内の人々が通りにあふれたことは当然なことで，子どもたちはあちらこちらを走り回って夜遅くまで遊んだ。『東国輿地勝覧』に多数出てくる初八日を唄う詩が，当時の様子をリアルに表現してくれる。朝鮮伝来の初八日習俗は，‘乱場’となってしかるべき，自由奔放な祭りであった。屋台や夜店が建ち並ぶ寺や周辺の村が特に賑わったのは言うまでもない。『朝鮮의 民俗놀이』(1988) も乱場の雰囲気をよく伝えている。そこには，“燃燈会と八関会を行なうときは，歌を歌い踊りを踊るために野外舞台を作り，この舞台とその周辺にたくさんの燈をずらりとかけ燈山のような飾りをし，ま

23) 1971年に刊行された『法輪』第34号 (p.35) には次のような広告が載っている。お釈迦様の誕生日の観燈は，二和燈製作所の‘ひだ燈’をどうぞ！特徴①取り扱いが便利で②見た目もよく③値段が安いです。(一つ40ウォン，意匠特許第1651号。代表鄭己舎)

たこれを見物に来る道にも燈をつけて明かりの海を作った[24)]”とある。

しかし日帝下の初八日で気になるのは，式典行事を大変組織的に，また大層立派に行ったという数々の記録である。繰り返せば，寺から出発した白象行列は通りを回って寺に戻るコースを辿るのではなく，パレードしながら一同が記念式場に向かい，また式場がもっとも重要な空間となっていた。祭りの中心は寺や町ではなく，あくまでも式場であったということである。記念式場には‘動員’された学生たちや，何とか婦人会，同志会といった団体の人々が秩序整然と座っており，朝鮮総督府の総督をはじめとする権力者たちが参列した。そして彼らの時局講演演説を聞き，寺関係者たちは彼らと同席した。このような行事方法が，解放後から現在までの韓国の初八日記念式行事方法にどのような影響を与えたのか解明することも，今後の課題である。

一方，提灯行列あるいは燃燈行列というものが，言葉の通り整然と行列をなした行進として残っている現在の風習にも，不審な点が少なくない。しかし，このように初八日のすべての要素一つ一つを引っぱり出して立証しようというのは，効果的な作業とはいえない。そこで，ここからは花の問題一つに絞って具体的に考えてみたいと思う。

花祭りが日本版四月初八日だということは度々指摘した。そして花祭りにおけるキーワードは甘茶と花であり，この二つの特徴から東アジアのほかの国々の四月初八日と区別できる。しかし，韓国の初八日では花は中心ではなかった。文献資料でもそうだし，インタビュー調査でもその通りであったが，初八日を解釈するにはあくまでも燃燈が重要な鍵になる。だが日帝は初八日の代わりに花祭りを行い，燃燈ではなく花と甘茶に重きを置き，実際に京城で行われた花祭りでは，日本と同じように花を売り買いする光景や，甘茶を接待するのがあちこちで見られた。

ここで問題を再び絞り，花を売り買いする光景だけをもう一度整理してみることにする。

1．此日（京城の）各要所要所には，仏教婦人達が花売りをなし……[25)]

2．（京城の）街頭に人の波が流れる時分には各宗佛教婦人会員の捧ぐる山と盛られた花がすばらしい勢ひでづれて行って老若男女，なべて道行く人の胸間に飾られていく……[26)]

3．仁川仏教各宗連合会の主催で午後3時より日校児童800名を加へて盛大に行なはれた。手に手に小旗を打ち振り胸に桜花を挿し，花御堂を負ふた美しい大象が奉賛歌に祝福せられながら市街をねり……[27)]。

24）科学院考古学및民俗学研究所民俗学研究室『朝鮮의 民俗놀이』図書出版푸른숲，1988，p.91
25）『朝鮮仏教』第50号，1928（全集31）
26）『朝鮮仏教』第61号，1929（全集32）
27）『朝鮮仏教』第61号，1929（全集32）

4．(開城では) 当日開城少年団及び開城券番組合長権容洛氏の肝いりで妓連の花売りがあり人目を惹ひた[28]。

5．総動員の（京城）府内各仏教婦人会員は，朝まだき，街頭に花籠を持って‘花を召しませ’の言葉もやさしく出勤の途にある，モガモボ，紳士，淑女，学生の胸に花を飾ってゆく。ひさしぶりの快晴と和やいだ花祭気分が次第に濃厚の度を増して……[29]。

以上は初八日を迎えて各地で花をつけてあげたり，売ったりした記録だけを抜き出した事例である。無料で配ったり販売したりもしたが，どれも左胸につけるという用途は同じである。花祭りを迎えお祭り気分を掻き立てる目的もあるが，日本民俗学では，一房に誕生仏の降臨を期待する日本人の民俗心意も込められていたと解説したりした。柳田国男は，花祭りの花は農耕儀礼や日本人の祖先崇拝信仰を説明する仮説において重要な鍵であるとし，日本民俗学は今でも花に注目しつづける。そこで，当時日本の花祭りで花が実際に何だったのかに焦点を当て，資料を確認してみたい。

1．(花祭りの) 当日は市内各所の街上にて花徽章を売るにつき一般参拝者それを左胸部に附け入場すべし[30]。

2．日比谷で今日午後一時から釈尊降誕会の花まつりが営まれた公園大運動場の中央には潅仏像を安置した花御堂を設け伝道所，甘茶接所其他の天幕張りが会場の周囲に建連らねてある，五彩の吹流し雨に悩む正門の辺には，早くから花籠を抱へた女学生の一群居流れ‘花召せ’の優しい声を会衆の甲乙に浴びせれば……[31]。

3．続々と集まってきた善男善女や男女学生団，佛教婦人団外人並に一般参拝者で正午頃は夥しい人出となった，各公園入口では女学生が花マークや小さい花御堂などを売っているが早大の武田豊四郎教授が印度の学生服で，ザリーといふ印度貴婦人の礼服姿の十人の美人を率いて花マークをすすめていたのが著しく人目を引いた，……[32]

4．(東京) 都内佛教各派連合の第八回花まつりは先ず少年少女大会から始まり連合大会の開かれる午後一時には菊花の徽章を胸につけた佛教各派男女学生，青年団はじめ善男善女の群れで広い会場を埋め尽くしている，その間を縫って‘お釈迦様を生花

28)『朝鮮仏教』第61号，1929（全集32）
29)『朝鮮仏教』第73号，1930（全集33）
30)『東京朝日新聞』1920年4月7日火曜日
31)『東京朝日新聞』1921年4月9日土曜日
32)『東京朝日新聞』1922年4月9日日曜日

で御供養ください’と女学生連が，紅，紫，黄とりどりの花束をすすめているやがてこの朝八時浅草公園の本部を出た花御堂は……[33]

5．午後三時から曹洞宗大学生が釈尊劇孫悟空を上演した。尚連合会は釈尊の誕生地として印度皇帝たる英帝と暹羅皇帝に祝電を発し，また集まった人々へは花の徽章六萬個を頒った[34]

6．八日はお釈迦様の誕生日，市内各所で‘花まつり’が行はれた。東京連合花まつり会主催の‘花御輿駐御の儀’は午前七時浅草寺境内に天台宗の山伏，当番寺築地本願寺の僧侶等百余名集合，市内各所を渡御。午前十一過本社にも立ち寄り日比谷音楽堂の東京連合花まつり会主催‘花まつり’の会場に繰り込んだ，戦没者遺族の慰安法楽で愛国行進曲の合唱，幼稚園児童の舞踊も‘軍国子守唄’，戦勝祈願，戦没将兵慰霊供養法要等全く軍国調であった。花祭りの八日朝，第一陸軍病院に咲き香ふ花千五百鉢がトラックで届けられた。これは市慶会，市園芸組合連合会の寄贈で娯楽室に飾られた[35]。

全般的に花祭りの当時の様子を思い起こさせる資料である。また，ここでは省略した資料とともに読んでみると，京城の初八日の内容とほとんど重なり合うことに気付かされる。日取りが朝鮮は陰暦で日本は陽暦だという違いだけである。とにかく，日本版初八日である花祭りに，京城と東京では胸につけた花という同一の風景が展開された。記念式場に向かう人たちに花を売ったり直接つけてあげたりした。京城の奨忠壇公園と東京の日比谷公園は，それぞれ釈迦の誕生を象徴する記念式場であった。ここで胸につけた花は，記念式場に参加する人たちにとってはまるで入場券のようなものであり，一体感を感じさせるバッジのようなものだった。病院に入院中の軍人たちにとっては，花に投影された釈迦の慈悲が施されるように祈願するものでもあったし，時局を反映した軍国調花祭りの象徴でもあった。花をつけてあげたり売ったりするのは仏教婦人会の女性たちの担当であったが，少女たちが行ったりもした。資料3の花マークというのも，花徽章と同じように左胸につけるものであった。

そうだとすれば，このように使われた花祭りの花徽章が，解放後にも韓国の四月初八日に果たして残っているのかを気にせずにはいられない。この問題は現代韓国文化の本質や伝承問題をもう少し客観化する上で必要であると判断するため，明らかにしておきたい。

京畿道水原市は筆者の出身地であり，奉寧寺や華城竜珠寺はよく訪れたところである。初八日に燈を見に行くと，そこに来る人たちは大部分左胸に花やリボンのようなものをつけていたのを覚えている。これは，はっきりとは言い切れない無責任な記憶かもしれないが，直

33)『東京朝日新聞』1923年4月9日月曜日
34)『東京朝日新聞』1924年4月9日水曜日
35)『東京朝日新聞』1938年4月9日土曜日

接調査した2001年にも‘リボン’という名前で今も伝承されていることを確認した。ぼんやりとした記憶は事実であったようである。それでは筆者の調査カードを通して再確認することにしよう。

[事例1]

四月初八日には五台山月精寺に行き，燈をつるして来る。燈は一つをつるし，余裕があるときはいいものを，ないときには小さいのをつるす。3万ウォンのものに家族全員の名前をのせる。燈は初八日前にあらかじめ行ってつるすこともある。早く行けば境内にもつるし，外につるすこともある。5年前くらいに（月精寺で）胸に花をつけてくれたと思う。ほかの寺では今もつける人がいる。お釈迦様の誕生日という文字がリボンに書いてあって，月精寺はムクゲをつけてくれる。ソウルやほかのところでもやることだ。月精神寺は一番感じがいい。非信徒もごはんを食べられる。(2001年6月26日，江陵市端午場クッ堂で夜に調査。61歳のおばあさんが口述)

[事例2]

清平寺は提灯行列できない。燈をつるすのは2000個ほど。誕生佛の浴仏式は大雄殿前でやり，このとき賽銭がたくさん入ってくる。ここは信徒がそれほど多くない方だ。浴仏のとき花も置いて（浴仏用）水は渓谷から汲んでくる。石階段の下では参拝客に胸に花をつけてあげる。観光客も信徒もみんなつけてあげる。信徒会の人たちがやってくれる。信徒会は燈の受付もし，大仏連（大学生仏教連合会）もやってくれる。(2001年8月28日，江原道春川市北面清平寺で午後調査，55歳くらいの事務室職員口述)

[事例3]

これはリボンという。(2001年8月29日，ソウル曹渓寺前仏教用品店で聞く)

[事例4]

IMF以後，信徒が増えないでいる。胸に花をつけてあげ，リボンと呼ぶ。他の名前は聞いたことがない。どのくらい歴史があるのかもわからない。浴仏のとき，下の霊山薬水で汲んできた玉水を使う。(2001年9月4日，京畿道水原市普門寺で40歳くらいの女性菩薩口述)

上の資料はすべて2001年の調査資料であり，口述内容の中で花に関する部分を中心にその前後を縮約した。左胸につけた花の問題を理解するのに手がかりになるであろう。以上をまとめてみると，次のような事実が認められる。すなわち，今も初八日になると信徒会のよう

な団体の婦人たちが寺の入り口で参拝客に‘リボン’をつけてあげること。そして，以前に花徽章とかマークとか言われていたものがリボンに変わっていて，またすべての寺で確認したことではないが，月精寺ではそれが韓国の国花であるムクゲになっていたという事実だ。つまり，花祭りの花徽章の文化はリボンにはっきりと残っており，桜や菊は間々ムクゲに変わったのである。

桜や菊がムクゲに変わった事例を通し，わたしたちは初八日が花祭りを取捨選択したと見ることができるだろうか。日帝という外圧のために受け入れざるを得なかった花祭りが，外圧の解除と同時にともに解体されたのではなく，その一部を初八日が受容したと見ることができるだろうか。［事例４］を話してくれたのは寺関係者であり，仏教に通じた人物であった。しかしリボンに関しては聞いたことがないと言った。そして，このような反応は以外にも大部分の寺で同様であった。ここで，韓国の寺にリボンに対する問題意識があったと見るのは，まだ時期尚早のようであり，それよりはまず民衆の思惑が反映されたのではないかと考えたい。そのなかには一般信徒や仏教用品業者の考えがあり，また時折僧侶の考えが含まれることもあるだろう。このように，誰か特定された人のアイディアというより，大勢の人々の思惑や無意識が込められているのではないか。花徽章は伝承され続けながら，いつのまにか‘リボン’という名前に変わり，桜や菊の花は‘ムクゲ’へと変化を模索したものだと考える。

このような韓国の外来文化受容を通して見ると，韓国人自らが残してきた日帝文化が厳然と存在するという事実を認めずにはいられない。しかしそうだとしても，まだ疑問が拭いきれない課題がある。“初八日のムクゲは何か？”である。

４．おわりに

初八日に対する花祭りの影響は，これ以外にもたくさんある。しかし，論理展開の便宜上，花の問題，なかでも特に左胸に飾るリボン一つだけを分析対象として絞って見た。そして資料は，主に日帝下の朝鮮で発刊された刊行物や，日本で発刊された新聞または仏教関連の雑誌を用いた。

このような資料を通して明らかになったのは次のような事実であった。はじめに，初八日に対して日帝は想像以上に関心を持っていたこと。二つ目に，朝鮮時代という暗いトンネルを通ってきた朝鮮仏教，そのなかでも初八日は花祭りによって一時の変化を免れなかったこと。三つ目に，今の初八日の風習には，花祭りの風習が残っているという事実である。そして，この三つ目の花祭りの遺習として，現在花祭りのときに左胸につける花を想定した。

その花を今韓国人は普遍的にリボンと呼び，一見花祭りの花徽章とは別物のようになった。数十年間伝承され続け，徐々に変化の過程を経たこともその原因になりうるが，日帝文化と

いう事実を忘却，あるいは変形した受容だと見られる点もある。そして変形した受容が事実ならば，今の韓国の初八日文化は，韓国はもちろん南伝仏教や中国，日本といったさまざまな外来要素が混合された多分化祝祭であるという事実も認めることができる。

四月初八日を多文化のモデルとみなすならば，民俗学では連鎖的な考察をしなければならない。すなわち，変形した受容は意識の変化を伴ったものであり，そうだとすればもともと外来文化が持っていた意味と韓国人が受容しながら再構成した意味には，どのような差異があるのかという問題である。例えば，日本人が花祭りに花を飾る習俗について，釈迦や農耕神を降臨させようとする請神祈願だと日本民俗学では解釈するが，そうならば今の韓国の初八日でムクゲは何を意味するのかを考えなければならない。

韓国人も，同じ心意を投影しようと残してきたものなのか，あるいは混乱と忘却のために残された単純な飾りなのか。一日でも早く，この問題を五里霧中から引き出したい。

参考文献

任東権『韓国風俗誌』乙酉文化社，1988.
科学院考古学및民俗学研究所民俗学研究室『朝鮮의 民俗놀이』図書出版푸른숲，1988.
朴景勲『佛教近世百年』民族社，2002.
林慧峰『親日仏教論』上・下，民族社，1993.
『朝鮮佛教』第2号，1924年6月，(『韓国近現代佛教資料全集』'以下全集' 25，民族社，1996.)
『朝鮮仏教』第25号，1926（全集27).
中村健太郎「連合花祭に就いて」『朝鮮佛教』第49号，1928（全集30)
「京城五団体連合奉讃花まつり—総督，政務総監の臨場」『朝鮮佛教』第50号，1928（全集31)
朝鮮仏教団丸山公州支部長「忠南公州の花祭挙行」『朝鮮佛教』第50号，1928（全集31)
『朝鮮佛教』第61号，1929（全集32)
『佛教』第60号，1929（全集10)
『朝鮮佛教』第72号，1930（全集33)
『朝鮮佛教』第73号，1930（全集33)
『朝鮮佛教』第100号，1934（全集35)
中村健太郎「釈尊降誕奉讃の感」『朝鮮佛教』第110号，1935（全集36)
『朝鮮佛教』第111号，1935（全集36)
『佛教時報』第12号，1936（全集37)
『佛教時報』1937年5月号（全集37)
『佛教』新第13輯，1938年6月（全集19)
『佛教』新第14輯，1938年7月（全集19)
徳光允「大東亜戦下の花祭を迎え」『佛教』新第36輯，1942年5月（全集22)
徳光翼「決戦第二年と新しい佛教への構想—仏誕を迎えて」『佛教』新第7輯，1943年4月（全集23)
「東亜仏教大会の経過」『支那時報』第3巻第6号，東京支那時報社，1925年12月。
朝鮮仏教団『朝鮮仏教大会記要』1930.
『東京朝日新聞』1920年4月7日(火)
『東京朝日新聞』1921年4月9日(土)

『東京朝日新聞』1922年4月9日(日)
『東京朝日新聞』1923年4月9日(月)
『東京朝日新聞』1924年4月9日(水)
『東京朝日新聞』1938年4月9日(土)
『法輪』第34号, 1971.
『高麗史』